第２８回 BBL 開催報告要旨

2007 年 10 月 3 日

開　催　日　時　：２００７年１０月３日（水）　１２：００～１３：００
ゲストスピーカー：中島岳志氏（北海道大学公共政策研究科准教授）
モデレーター　　：小田正規（公共政策プラットフォーム）
開　催　場　所　：参議院議員会館第２・３会議室

・　“ナショナリズム”が政治化した最初はフランス革命（1789 年）であった。
・ フランス革命によって国民国家が誕生したとされているが、まさに国家の正当性がそれまでの絶対王政時の血統と王朝の古さから、nation（＝主権者）である市民によって支えられる国家へと変わっていった。
・ ここにおいて、“ナショナリズム”は保守とは結びつかない。“ナショナリズム”は「国民主権」と親和的である。

・ フランス革命を批判したのは、保守の父といわれるイギリスの哲学者エドモンド・バーク（『フランス革命の省察』）で、バークは急速なレジュームチェンジは圧政を生むとし、変革は漸進的に行うべきだと説いた。
・ ここにおいてもまだ、保守＝ナショナリズム、リベラル＝アンチナショナリズム、ではない。

・ ベネディクト・アンダーソンはナショナリズム研究の古典ともいわれる『想像の共同体』を著し、フランス革命のような主権者である市民の下からの改革を、上にいる政府が利用する、という“ナショナリズム”の変容を指摘した。

・ 日本における“ナショナリズム”の発露は、自由民権運動に見られる。1920 年代後半には、現在以上の格差が存在した。これは、権力闘争に敗れた人たちが、権力を握る一部の人間たちを武力ではなく言論によって倒そうとした“ナショナリズム”である。

・ このとき頭山満（とうやまみつる）らの玄洋社が活躍したことによって、日本の右翼と“ナショナリズム”が結びつくこととなった。

・ 戦後から1960年代においては、革新勢力が“ナショナリズム”を引っ張っていった。
・ これは60年安保闘争のあと、丸山真男や竹内好らが座談会で「日本に“ナショナリズム”が確定した、めでたい」といっていた。
・ このあたりについては、小熊英治の『民主と愛国』を。

・ 70年代以降、革新“ナショナリズム”は姿を消していった。

・ 現代においては、格差社会と“ナショナリズム”、という問題がある。ロストジェネレーション世代（25歳～35歳）と今の“ナショナリズム”がシンクロする危険性があるのだ。
・ 1930年代は今以上の格差社会だった。当時の“ナショナリズム”は「血盟団事件」を引き起こし、五・一五事件、二・二六事件へと繋がっていく。
・ 血盟団事件の首謀者井上日召（いのうえにっしょう）らの思想は、「天皇以外は皆等しい」のがこの社会はずで、それが天皇の大御心である。しかしその天皇の大御心をじゃましているのは一部の裕福な人間たちである、とするものだった。
・ スピリチュアルと“ナショナリズム”と平等思想が組み合わさったのが、昭和維新だった。

・ 今また、スピリチュアルは若者、とくにロストジェネレーション世代に広がっている。スピリチュアルと“ナショナリズム”が、架空の平等を媒介として結びつく土壌はできた。ネットカフェ難民がその温床といえるかもしれない。
・ 本来“ナショナリズム”は「平等」と近い関係にある。これに対し、小泉元首相は競争の促進によって格差を生じさせた。“ナショナリズム”と格差は相反するものだ。同時に北朝鮮問題や靖国問題などを通じて「架空の平等性」を提示することによって、格差社会で苦しむ人々を取り込んでいった。

※ このBBL開催報告要旨は、公共政策プラットフォーム事務局が作成したものです。